

(第3種郵便物認可)

サイ・テク 知と技の発信

【587】

埼玉大学・理工学研究の現場

皆さんは、一人で入りづらい場所がありますか？ 女性が一人でラーメン屋に入りづらい、男性がスイーツ店に一人で入りにくい。そんな光景は珍しくないかもしれません。

私が学生時代に一人で足を踏み入れるのをためらったのは、ラーメン屋でもスイーツ店でもなく、学会発表の会場でした。会場のドアをくぐった瞬間、周囲の視線を全身で浴びた気がして、すっかり

萎縮してしまつたのです。私の専門分野である数理解物理学では、男性研究者や学生の割合が多く、女性である私は会場で珍しい存在だったようです。しかし当時の私は「女性だから場違いなのでは」と周囲の視線を必要以上に気にし、

自分の中に偏見を育てていました。この偏見が消えるまでには、研究者の知り合いが増え、「私はここにいていい」と確信する時間が必要でした。

カガク、ミンナノモノ

金城佳世 助教



振の返れば、「女性だから」という理由で自分の可能性に蓋をしようとしていたのは、自分自身だったのかもしれない。

日本でも科学分野における女性の割合を増やすことが課題として取り上げられて久しいですが、「リケジョ（理系女子）」という言葉が広まり始めた十余年前に中高生だった私は、この言葉に違和感を持つたことを覚えています。リケジョのモチーフとして、ピンクや花柄が一緒に充てがわれることが多く、科学の世界にも、洋服のように「レディース」「メンズ」が

あるのかと感じたこともありま

す。けれど科学は本来、性別を問わない普遍的なものです。この科学が技術へと応用されて、男性向けや女性向けの製品や技術が生まれることはありますが、科学そのものは誰にでも開かれた世界です。

ラム問題」。この研究は非線形科学やカオス理論の発展に繋がる重要なものですが、数値解析を担った女性プログラマー、メアリー・ウィングウの名前は長らく省かれてきました。最近になり、彼女の貢献が認められ、「フェルミ・パスタ・ウラム・ウィングウ問題」と改名されたのです。

歴史に名前が刻まれなかった多くの女性たちが、科学の扉を支え、次の世代への橋をかけてきたのだと思います。そして私たちは今、その橋を渡る立場にいます。科学は決して一人で立ちまわるところではなく、国籍などの社会的背景をも超えて、知的好奇心を持つ全ての人に開かれた誰もが一步を踏み出せる広い大地なのです。

きんじょう・かよ 1995年生。2022年3月お茶の水女子大学人間創世文化研究科博士後期課程修了。博士（理学）。24年4月から現職。専門は数理解物理学。